

六朝門閥の一研究

——太原王氏系譜考——

守屋美都雄 著

昭和二十六年七月

東京日本出版協同
株式會社發行

A5判 一五〇頁 定價 一八〇圓

中國家族の研究は社會學、法制史學、中國哲學の諸方面のみでなく、歴史學、東洋史の側からの研究方法が確立されねばならない。著者の言葉をかりると、「いままでの研究の上に、いくらかでも動的な見方を導入すること」限定された家を當面の對象とし乍らも「歴史の流れ全體の究明」を狙っていること、更に具體的には「六朝から唐にかけての家族の問題を、その時代の門閥の盛衰を通じてとらへると共に、六朝の門閥制が唐末の官僚制に移つて行く経緯を家族の面を通じて明らかにしようとする」こと——これが冒頭に掲げられた研究の方

法及び目的である。

當時天下の名族の代表的なものとして知られた「山東の郡姓」の中より太原王氏が選び出される。太原王氏の據拠期は後漢中期頃と推定され、信すべき系譜も後漢末の王柔・王澤兄弟迄遡りうる。この頃から三國時代にかけて王氏の社會的地位は益々昂まり、始祖傳説が形成されたのも、家柄の粉飾と、その家の繁榮に寄與するといった、門閥社會形成期の現實的要請の所産であろうと考えられる。(第二章、始祖傳説の批判) 所でその證據の一つに次の様なことがいわれている。即ち「名族の定評」はその家人の教養に對する敬意から生れるが「その教養は幾代かに亘る官位の獲得が前提條件となつた」。九品中正制が實質上「豪族の官途獨占」をもたらした時、「かかる機構の中に官位をえようとすれば畢竟個人の才幹に頼るよりは族全體のひろがりやを大にし、族の名聲を高めるに如くはない」と。このことを特に引用したのは、こゝに氏の門閥に關する考え方がすでに表明されているからである。即ち門閥成立の基本的條件としての「教養」に對する社會的尊敬と、世襲的官僚としての地位、これが門閥を大族、豪族から區別するものである。王氏がかかる門閥としての地位を獲得したのは西晋から東晋にかけての時代であつた。王柔・王澤の子孫達は五胡爭亂の時代に遭遇すると、華北における一切のものをすてて南遷し、やがて東晋王朝治下屈指の名族となつた。著者によればこの名族王氏の生活を支えた經濟的基礎には、天子からの賜與、自分の統治する地域の民衆に對する調役、官吏としての收賂、或は私兵による耕作、私附の奴婢・佃客化等々があげられる。門閥の經濟的或は精神的な生活については後にも觸れる機會があるであらう。ともかくその繁榮をもたらしたのは、いち早く南渡し、「王朝に結び、官位を獲得することによつて」

であつた。だから「それだけにこの家は政治的な事情によつて崩壊する危険性も多分にあつた」。けれども王氏が築いた南朝貴族としての政治的地位、それに加えて王柔家の王嶠・王濛以下王修・王恭、王澤家の王倫・王湛・王濟・王述等々、著者の所謂「完全な個人」を多く擁する家全體としての社會的名聲、これこそが、劉裕の興起による族滅の危機を脱した唯一の血統王懸龍が、北歸後王氏の再興をなし得た原因であつた。「王氏といふ家柄そのものに對する無條件的な敬意」「名族の聲望は現實の族的結合や經濟力の有無を超えたものだつたのである」。(第三章 王氏の門閥化とその生活、第四章 王氏の移動) 王懸龍の子孫は、彼以前と同じく多くの并州大中正を出した。即ち南北朝末期迄「常に官界への勢力擴大の機會を掌握してゐた」こと、「これこそ、この家の門閥としての繁榮の最大の原因であつたらう」。けれども北魏の王瓊の四子から出た四房の子孫達はやがて隋を経て唐朝を迎えた。而して王氏はやがて多くの進士合格者を出した所の官僚的名門として存続したが、この時代に至ると彼らの門閥としての族的意識は崩壊しており、門地主義からの脱却と循吏化が指摘されている。勞系諸王氏についても略同様のことがとかれてゐる。即ち門閥的豪族的存在から官僚への變化、烏丸王氏に傳統的な儒術主義の精神と唐朝の統治方針との對應、等々。著者は外戚としての地位を利用しての蓄財、或は「新官僚型の豪族化」が、「所詮外戚としての地位を離れては蓄へえないものであり、したがつて、その富の大きさにも拘らず、その家は王室の前には無力な存在であつた」し、「天子の威嚴の前に官僚的豪族ははなかない存在でしかなかった」といふ。文中子王通家の衰運にみられるような「富の減少は専ら官位卑しきに由來する。逆に言へば官位が高くなければ門戸は大きくならないといふ時代

になつた。王賢が躬ら耕すのを棄てて郷舉に赴いたのは門閥が官途につく方向に轉身せざるを得なかつたことを具體的に示してゐる」のである。(第五章 門閥制より官僚制へ、第六章 王氏諸旁系の出現) 第七章は、第六章迄の王氏についての検討を、山東の名族一般の考察によつて裏付けようとしたものであらう。安史の亂から五代にかけての時代は、舊門閥の衰退に決定的な打撃を與えた時代であつた。唐朝の成立からこの時期迄は、門閥の社會的な優越性が根強く残つてゐた。けれども氏があげられた幾つかの現象、例えば科舉制、官僚に對する經濟的恩典、儒教的な家族儀禮中重要な位置をしめる所の立廟の權限が官位に伴つて規制を加へられたこと、其の他、唐朝の官僚に對する儒教主義的な家族儀禮の遵奉の強調、等々は、歴史の大勢が官僚制社會へと移行しつつあつたことの例證とされている。この意味で唐代は「門閥制から官僚制への過渡的時代」であり、王氏と雖もこの大勢に抗しうる何物でもなかつたのである。

唐宋の間を中國史の一つのエポックと考え、それを、中世貴族制社會から近世官僚制社會への變化としてとらえることは内藤湖南博士以來略定説化されている所である。著者もこの立場に至つて、唐代における過渡の様相を究明されたであらう。然し乍ら門閥と雖も、官僚と同じく、「官位」といふもの、言いかえると官僚としての地位及び君主との結合に於いて政治的支配階級たりえたことは、秦漢帝國以來の中國社會に特徴的な政治機構であるデスポティズムの必然的な現象形態であつた。唐・宋の間に見られる様な全社會的な變革は勿論君主をふくめた支配階級の變質を伴う。氏が王氏をふくむ山東の名族について指摘された過渡の様相は、かかる支配階級の變質過程に外ならぬ。「教養」すら氏の言われる様に官僚としての地位を離れては考えられ

ぬとするならば、著者の立場の立つ限り、かかる變質過程の基本線は、門閥・官僚の政治的存在として在り方に求められる。これを逆にいうと、王權の存在形態の問題ともいうるであろう。著者の指摘された諸現象は、王權と門閥或は官僚の間の相關關係の諸變化として理解して差支えあるまい。たとえば七七頁には大要次の如きことが記されている。即ち六朝門閥が富を蓄積する第一歩は主として官僚としての俸祿、賜與、贈與を受けるところから出發しており、唐代官僚の蓄積手段も之と全く異つてゐるとは考えられない。しかし兩者の間には次の様な本質的な相異がある。一、王朝に對する服屬意識、二、六朝門閥が中正の官を輩出して官界進出の便をもち、又故吏を自家の勢力圈に加えて、いわば公的な制度の中に私的關係を導入したこと、三、同族意識の有無。

これらの諸點は概括的に言つて、王權と門閥・官僚の間の力關係の問題につながる。しかし乍ら、こゝに力關係といつても、言ひ迄もなく兩者の間に本質的な對立があつたとは考えられない。兩者の結合によつて政治的支配階級の機構が成立するのであつて、特に六朝の場合は、王權は支配階級たる門閥、官僚の持つ社會的權力に大きく支えられ、むしろその中に埋没されてゐるとさえ言ひうるのである。而もその支配機構内部に於て、六朝末期より唐朝にかけて王權が次第にたかまり（この點について私は北魏王朝のもつ歴史的位所に注目したいのであるが）君主と門閥、官僚の關係に變化が生じた。即ち六朝とは逆に、前者が後者の力を抑制しなければならなくなつたという様な動きがある。この點をただ支配機構内部の自己運動としてのみとらえることは果して如何であらうか。當時における基本的な對立（それはやはり君主をふくめた支配階級と、その收奪の下にある農民・部曲・佃客・

奴婢等の間にあると思うのであるが）が、あらゆる面に、種々異なる形で現れ、さまざまの社會的矛盾をかもし出し、不斷のたたかいを通じてそれが克服されていく過程、こゝに支配階級内部にすら對立と變化を生ぜしめた究局の原因があつたように思ひのである。支配階級の動き、王權と政治機構の變化は勿論重要な問題であるが、視野がそこにも局限される限り、何故起り、何故その様な過程をたどつたのかという疑問に答へることが出来ないのではないか。更に私は著者のいわれる唐代官僚と、周藤吉之氏が描出された宋代官僚とは質的な差異を持つように思ひのであるが、若しそらだとすれば、このことは一見超階級的な外貌をさえもつ宋朝王權の典型的な中國のデスポティズムの出現や、宋代佃戸制の展開と決して無關係ではない。而もそれが一舉に形成されるものでもないとするならば、唐中期から宋への社會的な變革の規模の大きさと、様相の複雑さとを痛切に感ずるわけである。

著者がひかれた森三樹三郎氏の研究は、六朝門閥が政治的地盤の上に立ち、豊かな財力を背景とした官僚貴族であつたことを示している。著者の所謂官僚の「豪族化」ということも、富の蓄積と大地所有、經營をさしているのであらう。これこそ門閥、官僚の權力を支える地盤であり、ひいては王權の支柱でもあつたのである。東晋初頭においては、専ら天子の賜與、俸祿並びに役柄に伴う收益を物的基礎とした王氏が、やがて客數百人を擁する様になつたといふことは此間の事情を物語るものであらう。氏も又王氏が唐初を下ると、代表的な名族の枠の外に出て行く傾向があるのをとらえて、「この事實は、おそらく太原の王氏が六朝時代において二度までも地域的な移動を餘儀なくされ、豪族としての地盤を失つたことに由來するのであらう」と説明されている。勿論この地盤の喪失が直ちに門閥の地位の解消を意味

するといふのでわらない。一旦貴族制社會が成立すれば、そこに生じた社會的な力と通念は根強く働く。けれども貴族制社會の成立にとつてかかる基盤を無視出来ない以上、個々の研究は全體的關係の中に正しく位置づけられるべきであらう。

この様に考えてくると六朝門閥や唐代官僚の研究にとつては、彼らの政治的、社會的存在の基盤である所の、同族或は故吏、部曲等との結合形態、客、奴婢をも含めた家族の構成、それらの土地所有及經營形態等の研究が不可欠たる重さを持つのである。(この點については、結びの章において極めて重要な史料の提示と指摘がなされている。たとえば族の結合の弛緩、家族の範圍、大きさ、或は擬制的血縁者を含む構成、隸屬關係、地方豪族の場合等々)ある社會における生産力の發展と、それに伴う生産關係の變化、從つて社會全體の發展と、それを貫く特殊性が、基礎單位たる家族の——内部では構成し結合の諸關係、外部的には家族が村落、或は國家等社會全體の中に占める位置——諸變化と相對應していることは、最近の日本古代、中世史の研究においても實證されている。更に言えば思想、文化等さえも家族的生活と切離されたものでわらないであらう。その意味で中國史研究の分野でもこの様な家族に關する研究は切望されているのである。この方面でかえり見られるのは仁井田陞博士が法制史の立場から、牧野巽博士が社會學的立場からそれ／＼なされた研究である。その他著者の守屋氏、宇都宮清吉氏が漢代についての研究をのこされている。最近に至つて西嶋定生氏が發表された漢代豪族の構成についての研究は、漢代社會の結節點ともいふべき豪族の核心に迫るものであつた。それに反して六朝門閥制社會とまでいわれる門閥の實態の究明が、今迄看過されていたといふことは不思議なことといわねばならぬ。著者が大

きな困難を伴うこの問題に注目されて、基礎的な研究をまとめられたことに對して深く敬意を表したい。忠實な紹介という役目をこえ、論點が逸脱したとも思うが、問題は氏が冒頭に掲げられた方法論が、より深く正しく發展され、東洋史學の上に一層みのり豊かな成果がもたらされることにあると思ひ。後學の疑問と考えをあえて提出した。著者の御海容と今後の御教示をお願いしたいと思ふ。〔河地重造〕